

後悔を学びに変えて

日立一高附属中学校 三年

木幡 きはた

奏海 かなみ

少子高齢化が進み、たくさんの福祉施設を

見かけるようになった。駅のホームの青い椅

子や電車、バスには必ず優先席がある。ス

ーパーマイケットの入口にはなだらかなスロ

プと手すりがついている。このように、社会

は高齢化に伴いバリアフリーの建設が着々と

進められている。

私は小学六年生の時に福祉イベントでの高

齢者体験に参加した。用意されていたヘッド

フォントとゴーグルと特殊な手袋をつけた。

すると視界は狭くなり、手足は重くなり、周

りが何を話しているのかよく分からない状況に

陥った。そこで初めて怖さを体感した。それ

と同時に人間は年をとるにつれ、体の様々な

機能が低下することを知った。そのため、

高齢者には真っすぐ目を見て大きな声で語

りかけるのよ。

と言うボラコンテアの方々の説明がよく理解

できたのを覚えている。

もういない大好きだった。そう祖母は高齢者

に多い認知症だった。ただん同じ質問をく

り返すようになっていき

「あ、そういえば夜ごはんまだ食べてない？」

と、そう祖母に言われて最初は、

「もう食べたよ。」

と笑みを浮かべて答えていた。しかし、その

ことを何回も聞かれ、勉強中でもあった私は

イライラして思わず、

「もう食べたって何回も言ってるでしょ?!!」

と声を張り上げてしまった。そう祖母は悲し

い顔をしながらも数分後にはその出来事を忘

れ私を見てニコニコしていた。そのそう祖母

がたくなっていた時、あの出来事を思い直して何

故やさしく接することが出来なかったんだろ

う。もっとお話すれば良かった。もっとなん

でいれば良かった。ただ後悔だけが残って

しまった。後悔は何度も自分を責め立てた。

身近にいたそう祖母を失って初めての感情だ

身

つた。今はそう祖母の娘、祖母が認知症にな
りかけている。あの日二度と後悔をしたくな
いと心に誓った私はもちろん祖母と日常会話
を楽しんでいる。

将来の夢は作業療法士だ。母の影響もあり
この仕事を知った。作業療法士は高齢者や事
故で右半身麻痺した人などをリハビリによっ
て少しでも回復させたり日常生活で困らない
ようにどうするかを考える仕事である。他に
も理学療法士などスポーツに携わる仕事もあ
るが、私は高齢者と接点のある仕事に就きた
いと思った。その仕事に就いて高齢者の笑顔
を見るのが夢である。

高齢化社会の中で福祉イベントの体験やそ
う祖母とあまり話せなかった後悔の経験をし
た。それらを学びに変え、働く世界に出た時
に生かしていきたいと思う。

電車の中で座れなくて困っている高齢者を
見たら席を譲ることを作業療法士への道の小
さな一歩として踏み出していききたい。